

小学校 ミニ盆栽を育てよう ～世界に誇る日本の伝統文化に触れる～

作成者：さいたま市大宮盆栽美術館 橋本 浩明・中村 慎太

■ 対象者・人数：小学生 10～30名

■ 所要時間：120分

■ 対象場所：学校、公民館

■ 指導者・アシスタント人数：

指導者1～2名、アシスタント2～4名



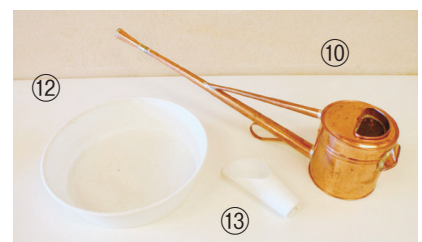
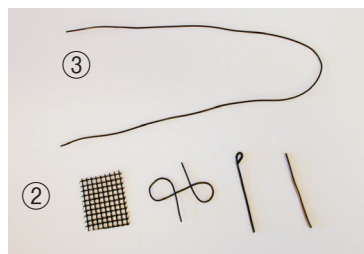
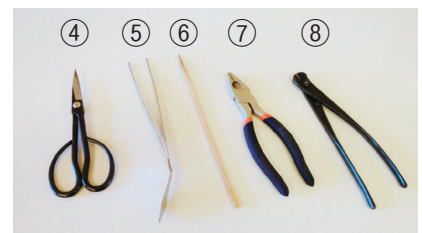
シンパク盆栽 完成例

実践概要

ミニ盆栽づくりを通して、海外での人気も高い日本の伝統文化“盆栽”に触れる。

■ 資材

- ①鉢
- ②鉢底ネット
- ③アルミワイヤー
- ④盆栽用ハサミ
- ⑤ピンセット
- ⑥先の細い割り箸
- ⑦ペンチ又はヤットコ
- ⑧針金切り
- ⑨用土
(赤玉土 小粒及び中粒)
- ⑩ジョウロ
- ⑪作業時鉢受け用
プラスチックトレイ
- ⑫用土配布用トレイ
- ⑬土入器 (カップ)
- ⑭持ち帰り用ビニール袋



■ 花材

- ・ 植木のポット苗
- ・ コケ (薄くてキメの細かいものが望ましい)



コケ



ポット苗

■ 指導内容と目的

盆栽とは、小さな鉢の中に草木を植え、自然の情景を凝縮して表現する日本の伝統的な文化である。成長する樹木と対話をしながら、自然の力と人の力によって時間をかけて作り出していく「生きた芸術」とも言える。

近年、盆栽は世界の共通語「BONSAI」として海外での人気も高く、日本の盆栽に触れるために来日する外国人も少なくない。このように世界的な広がりを見せる一方で、日本国内では「盆栽＝お年寄りの趣味」といった先入観も根強く、その本当の魅力を知る人が少ないのが現状だろう。

この実践では、盆栽づくりを体験することで、日本の伝統文化に触れるとともに、その背景にある、自然や四季を大切にする心や、小さな鉢の中に大きな自然を表そうとする日本人の伝統的な美意識について学ぶことを目的とする。自らつくった盆栽を大切に育ててもらい、日本が世界に誇る盆栽文化の担い手の一人となってもらいたい。

■ 対象者への配慮

- ・盆栽とは何か、その魅力や鑑賞の方法を伝える。
- ・盆栽は生き物であり、特に一般的な鉢植えに比べ用土が少ないため、大切に育てなければ枯れてしまうということを伝え、その後の管理方法についても十分に説明する。
- ・盆栽独特の用語は、わかりやすい言葉に置き換えて丁寧に説明する。
- ・可能であれば、ある程度の大きさの、手をかけた盆栽を見せ、時間をかけて育てていった先のイメージを持たせる。
- ・細かく緻密な作業が多いので、アシスタントの数は多い方が良い。
- ・ハサミやワイヤーなどを使用するので、怪我がないように注意する。
- ・使用する樹種は、丈夫で扱いやすいもの、暑さや多少の水切れに強いものを準備する。
（例）シンパク
- ・ワイヤーによる鉢への固定作業では、しっかりと固定されているか確認し、特に慎重に進める（固定が弱いと枯れる原因となるため）。
- ・名品盆栽を鑑賞することにより、芸術としての盆栽への理解も深まるため、盆栽展や盆栽園等を見学しても良い（例：国風盆栽展、大宮盆栽美術館）。
- ・育てていく上で困ったことがあった際に質問できる場があると良い（大宮盆栽美術館では小中高生を対象とした無料の盆栽相談を毎月開催している）。
- ・盆栽を芸術作品として鑑賞するために、児童がつくった盆栽を展示する場を設けても良い（「学校内ミニ盆栽展」等）

1. 指導計画・スケジュール

- ・第1回 植え込み
- ・第2回 剪定
- ・第3回 針金かけ

という全3回の実践を想定し、ここでは第1回の植え込みの作業について説明する。それぞれの回の間は、2か月程度空けることで、盆栽の変化を見ながら少しずつ形を作っていくことができる。

(大宮盆栽美術館では、9月に第1回、11月に第2回、1月に第3回といったスケジュールで、小学校での出張盆栽講座を実施)

- ・植え付けの前に剪定を行うことで、1回のみの実践とすることもできる。

<参考>大宮盆栽美術館での平成26年度盆栽ワークショップ開催実績

※季節に合った樹種をつかった館内ワークショップ

開催月	教材	開催月	教材
4月	クロマツ	10月	ツバキ
5月	アジサイ	11月	チョウジュバイ
6月	コハウチワカエデ	12月	松竹梅
7月	山野草のこけ玉	1月	シンパク
8月	ロウヤガキ	2月	サクラ
9月	ゴヨウマツ	3月	ヒメシャラ



5月 アジサイ



6月 コハウチワカエデ



7月 山野草のこけ玉



8月 ロウヤガキ



9月 ゴヨウマツ



10月 ツバキ



11月 チョウジュバイ



12月 松竹梅



1月 シンパク



2月 サクラ

2. 事前の準備

■ 会場との打合せ

- ・ 搬入経路の確認
- ・ 床や机の養生の方法について確認
- ・ 参加人数の確認
- ・ 最後に水やりを行うため、広めの流しがある部屋、または水やりが可能なベランダや、外へすぐに出ることのできる部屋であることが望ましい。

■ 資材の準備

鉢

- ・ 陶器製の中深～浅い鉢が良い
松柏（マツやシンパク）の場合は、施釉^{*}されていないもの（特に「泥物」と呼ばれる胎土の滑らかな焼き締め鉢）が望ましい
- ・ 雑木（モミジ、ボケ、サクラ等）の場合は、外側に釉薬のかかっているものでも良い
- ・ 直径8cm～15cm程度（3～5号）が作りやすい



※施釉（せゆう）表面にうわぐすりを施した状態のこと。

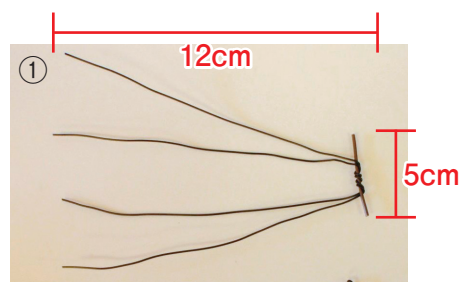
鉢底ネット

- ・ 園芸専用の鉢底ネット（ホームセンター・園芸店）
- ・ 鉢の底穴の大きさに合わせて、人数分に切り分けておく（鉢の底穴全体を覆う大きさ）

ワイヤー

- ・ アルミ製、直径1.2mm・1.5mm
- ・ 樹の固定用（直径1.2mm）、一人二本（鉢の大きさによっては一本）。直径1.5mmのもので作った軸に二本を巻きつけてつかう（右写真①）。
- ・ 鉢底ネットの固定用（直径1.5mm）、一人一本。メガネのような形に曲げてつかう。（右写真②）
- ・ 樹の正面の目印用（直径1.5mm）、一人一本。長さ4cm程度。一方の先端を輪にしておく。
- ・ 使用する樹木や鉢の大きさに合わせて、それぞれ必要な長さに切り分け、人数分用意しておく。

（高さ7cm、底穴直径3cmの鉢を使用した場合の長さの例）



盆栽用ハサミ

- ・盆栽用の枝切りハサミ
なければ園芸用ハサミで可

用土

- ・赤玉土の、中粒と小粒のもの
- ・中粒は鉢底に薄く敷く
- ・小粒は中粒の上に敷き、植え付けた根の周りを埋める



ピンセット

- ・表土の掃除や、コケの貼り付け作業の際に使用する。



先の細い割り箸

- ・根を崩したり、根と根の間や、根と鉢のすき間に用土をすき込むためのもの



ペンチ又はヤットコ

- ・鉢と樹木をワイヤーで固定する際に使用する
- ・盆栽の道具としてはヤットコが望ましいが、ペンチでも可



針金切り

- ・ワイヤーで鉢と樹木を固定したあと、ワイヤーの余った部分を切る

ジョウロ

- ・蓮口の目の細かいものが望ましい



プラスチックトレイ (作業用)

- ・A4サイズ程度の浅めのトレイ、1人1~2枚
- ・作業をこのトレイの上で行うことで、机を汚さず、片づけも楽になる。(根をこの上で崩せば、不要な用土をすぐに捨てることができる。水やり後は水が底穴からしたたるため、このトレイの上に乗せて運ぶ)

用土配布用トレイ

- ・用土をグループごとに配布するためのトレイ
- ・中粒と小粒、2種類の用土をそれぞれ別のトレイに入れ、グループごとの机に用意しておく

土入器（カップ）

- ・用土を鉢に入れる際に、用土をすくうためのカップ
- ・プラスチックカップ等でも代替可能

持ち帰り用ビニール袋

- ・盆栽が入る程度の大きさのスーパーの袋が良い
- ・底にたたんだ新聞紙を敷いておくと、底が平らになり盆栽を入れやすい

■ 樹木の準備

樹木のポット苗

- ・2～3号のポットで仕立てられているもの
- ・丈夫で扱いやすい樹種が望ましい（例：シンパク）

コケ

- ・ギンゴケ等、薄くてキメの細かいものが望ましい
- ・植え付け後の土の表面に貼り、美しく仕上げる

3. 当日の流れ

- ・時間 120分程度

■ 説明をする内容

- ・盆栽とは何か（その魅力・鑑賞方法等）、盆栽職人の盆栽を大切にすること

盆栽は、長い時間をかけて鉢の中で植物を育てていく。自然の凝縮された景色の一片を鉢の中に表現することが盆栽の魅力の1つだが、盆栽には次世代にその盆栽を受け継いでいき、時間と共に盆栽の形が変わっていく面白さがある日本特有の文化である。盆栽を家族の一員として大切に育ててほしいということや、自分の子供、孫に受け継いでいく気持ちで植物を育て、愛することの大切さを説明する。

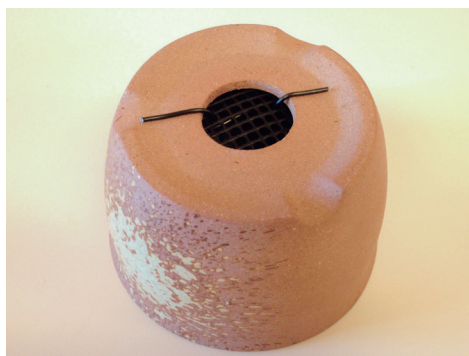
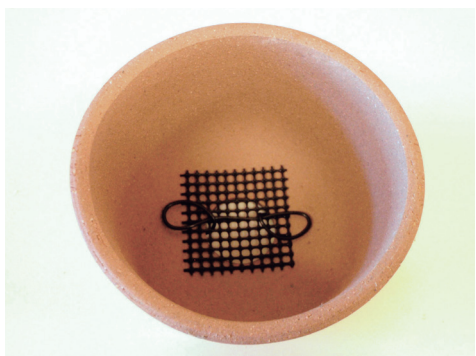
- ・日本の伝統文化であること、海外でも人気が高いこと
- ・鉢の正面の決め方について
- ・盆栽の正面の決め方について
- ・管理の方法について
- ・時間をかけて大切に育てられた盆栽を観賞できる場所について
（盆栽展や盆栽園、大宮盆栽美術館など）

■ 具体的な手順・指導ポイント

<シンパクを使用した実例>

鉢 : 直径9 cm × 高さ7 cm

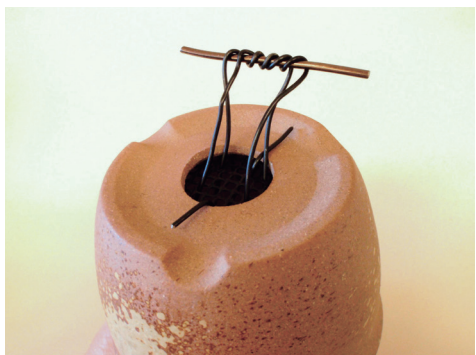
素材 : シンパク、高さ14cm



① 鉢の正面を決め、鉢底ネットをワイヤーで固定する。



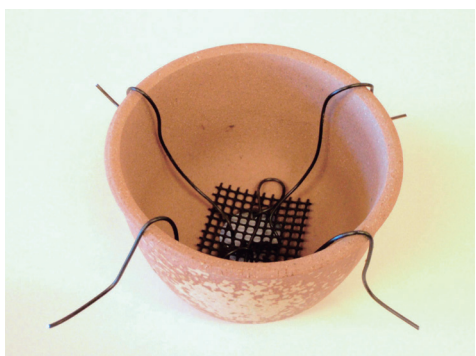
鉢の正面は、鉢の種類によって異なる。たとえば、脚が三本あるものは、一本が手前、二本が後ろに見える位置を正面とする。



② 樹の固定用のワイヤーを鉢底ネットに通し、鉢に沿って曲げておく。

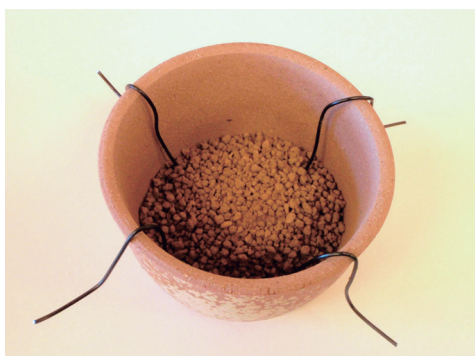


ワイヤーは、鉢底ネットの別々の穴に通すようにする。



③ 鉢底に中粒の用土を1 cm程度敷き詰める。

④ 中粒の上に小粒の用土を中央が山になるようにして入れる。(樹を置いた後に追加していくのでここでは入れすぎない)





⑤樹の全体の形を見て正面を決め、どこが正面かわかるように根元に短いワイヤーを刺し目印とする。



樹の正面は、幹の曲がり具合などを見て判断する。一般に、お辞儀をするように頭が倒れている方を正面とするが、この原則を教えた上で、どこから見るとより格好良く・きれいに見えるかを児童に考えさせるようにすると良い。



⑥シンパクをポットから出し、割り箸を使って根をほぐすように丁寧に崩す。すべての土を落とすのではなく、三分の一程度残す。根張りが見えるよう、根元の土も軽く落とす。（正面の目印としたワイヤーが取れないように気をつける）



⑦長すぎる根は、ハサミで切り詰める。



根を崩す作業、根を切り詰める作業等は、プラスチックトレイの上で行うと片付けが楽になる。



⑧鉢の正面と樹の正面を合わせ、山にした小粒土の上に根を押し込むようにして樹を置く。根元が鉢の縁よりやや低くなるように用土を調整する。



⑨ 樹の固定用のワイヤー（手順②）で根の部分をしっかりと固定する。ペンチでワイヤーを引っ張りながら締め上げる。余分なワイヤーは切り取り、端は内側に折り曲げておく。



ここでの固定が弱いと、樹が動いてしまい、うまく根付かないことによって、枯れる原因となるので、しっかりと固定されているか確認すること。力の弱い児童に対してはアシスタントがサポートする。



⑩ 鉢全体に小粒の用土を入れ、根と根の間、根と鉢の間に土が隙間なく入るように、割り箸を使って丁寧にすき込む。鉢の縁からやや低くなるくらいの位置まで用土を入れる。



⑪ コケは余分な土を落とし、土とコケが密着するように、用土の表面に押し込むようにして貼る。



⑫水やりのできる場所に移動し、ジョウロを使って水やりをする。

ポイント

鉢底穴から出てくる茶色い水が透明になるくらいまでたっぷりと水をやる。

盆栽を育てる上で水やりは最も重要な作業の一つである。自分の盆栽に最初のご飯をあげるような気持ちで、できる限り児童自ら自分の盆栽に水をやるようにする。



⑬完成。



地板（ぢいた）と合わせた
展示例



数年後の作品イメージ

■ 所要時間や配分

開始60分前 集合・学校や主催者への挨拶・打合せ
会場準備（床・机面養生、材料運び込み・配布）

20分（20分） 児童集合・挨拶（指導者・アシスタントの紹介）
盆栽についての説明

↓

80分（60分） 植え込み作業

↓

95分（15分） 水やり

↓

115分（20分） 今後の管理方法等の説明と片づけ

↓

120分（5分） 終了の挨拶、解散

■ 作成後の管理

置き場：日当たりと風通しの良い場所（棚の上など）に置く。直接地面の上に置かないようにする。

水やり：鉢土が乾いてきたら、鉢全体に水がしみこむよう、ジョウロで水やりをする。春・秋は1日1～2回程度、夏は1日2～3回、冬は2日に1回程度が目安。

肥料：春と秋に有機肥料を置く。

植替え：3年に1回程度、植え替える。（松柏は4月ごろ、雑木は3月ごろ）

芽摘み・剪定：伸び出した芽を随時摘み取り、樹形を整える。

■ 実施する上での課題

- ・ワイヤーでの固定作業等、ある程度の力が要る作業では、指導者やアシスタントが丁寧に確認する必要がある、時間がかかる場合がある。
- ・盆栽は、植え付けて終わりではなく、時間をかけて手入れをしていくことで美しい形に仕上げていくものであるため、その後の管理について丁寧に説明する必要がある。可能であれば児童の保護者にも管理方法が伝わるようにし、家族で大切に育ててもらえるよう促したい。
- ・その後の管理についても、ただ水やりをするだけでなく、手をかけて美しく仕立てていくことの面白さまで伝えることができればなお良い。

■ 改善点等

- ・管理方法について、季節ごとに注意する点等を定期的アナウンスする機会があると良い。
- ・名品盆栽には銘（名前）がつけられていることを写真などを見せながら教え、自分がつくった盆栽に名前をつけてもらっても良い。
- ・学校内で展示する機会を設けることで、大切に育てるためのモチベーションの向上や自分がつくった盆栽に対する愛着の醸成につながる。
- ・盆栽展や盆栽園、大宮盆栽美術館などへの見学を実施することで、様々な樹種の名品盆栽に触れるとともに、盆栽文化や盆栽師の仕事について、より深い学びにつながる。
- ・校庭や家の周りに生えている樹の中から、格好良い・美しいと感じるものを探してもらい、なぜそれに魅かれたのか、なぜそのような樹形になったのか、同じような形の盆栽は作れるだろうか、といったことを考えることで、盆栽を通じて身の回りの自然についても考える機会がもてるとなお良い。
- ・「世界に広がる盆栽」という観点から、盆栽が盛んな国や各国の盆栽文化について調べることで、国際社会に関する学びにつながることもできる。

